➢ チャリン（CHARYN）＝ イギリス

牡４歳・芦毛（アイルランド産・2020 年４月９日生まれ）
父：Dark Angel ＝ 母：Futoon（母の父：Kodiac）
馬 主　：ナーラン・ビザコフ氏
調教師　：ロジャー・ヴェリアン
騎 手　：ライアン・ムーア
戦 績　：全 18 戦７勝、２着４回、３着４回
総獲得賞金：約３億 9,540 万円
主な戦績　：'24 クイーンエリザベス II 世ステークス（G1）１着
'24 ジャックルマロワ賞（G1）１着
'24 クイーンアンステークス（G1）１着
'24 サンダウンマイルステークス（G2）１着
'22 クリテリウムドメゾンラフィット（G2）１着
'24 ムーランドロンシャン賞（G1）２着
'24 ロッキンジステークス（G1）２着
'23 サセックスステークス（G1）３着
'23 セントジェームズパレスステークス（G1）３着

チャリンはアイルランドのグレンジモアスタッドの生産馬で、1 歳時のタタソールズ 10 月セールでナーラン・ビザコフ氏の競馬事業ブランドであるスンベに 25 万ギニー（当時約 3,690 万円）で購買されて同氏の所有馬となり、ニューマーケットに厩舎を構えるロジャー・ヴェリアン師の管理馬となりました。

父のダークエンジェル（その父アクラメーション）はノーザンダンサー系で、ミドルパークステークス（G1）など芝 1,000～1,200m で 4 勝を挙げ、主な産駒にはクイーンエリザベス II 世ジュビリーステークス連覇のカーデム、ナンソープステークス連覇のバターシュ、日本のマッドクールなど、スプリント戦線で活躍する馬が多数います。母のフトゥーン（その父コディアック）は現役時に 1,000m 戦で 2 勝、チャリンの全兄ウィングスオブウォーは 2021 年のミルリーフステークス（G2）の勝馬でその後香港に移籍。その他の近親にはミルリーフステークス勝ちやゴールデンジュビリーステークス（G1）2 着のガレオータや、ドラール賞（G2）優勝のインセイシャブルなどがいます。

チャリンのキャリア初戦は 2 歳 8 月の未勝利戦（ヘイドック、芝 1,200m）で、かがむようなスタート後、残り 400m あたりでやや進路が狭くなる場面もありましたが、残り 100m で抜け出して半馬身差でデビュー戦を勝利で飾りました。続く 2 戦は 2、3 着と足踏みを続けましたが、この年の最終戦はフランスに渡ってのクリテリウムドメゾンラフィット（シャンティイ、G2、芝 1,200m）。10 月 8 日に直線コースに 6 頭を集めて行われ、ミカエル・バルザローナ騎手を背にスタートで遅れて後方からとなりましたが、徐々に進出して逃げたエディーズボーイを追撃、ゴール前で短クビ差だけ抜け出して初の重賞タイトルを挙げました。

3 歳シーズンに入り 4 月のグリーナムステークス（ニューベリー、G3、芝 1,400m）で始動して、デビュー戦以来となったデヴィッド・イーガン騎手とのコンビでこれを 2 着とすると G1 戦線に進みます。5 月の英 2000 ギニー（ニューマーケット、G1、芝 1,600m）はショーン・レヴィー騎手に鞍上を変えて 12 番人気での出走となり、後方から伸びを欠いて 8 着。続く愛 2000 ギニー（カラ、G1、芝 1,600m）はデヴィッド・イーガン騎手に戻って、5 番手あたりを追走、なかなか前が開かずに仕掛けが遅れ、勝ったパディントンから 3 馬身 1/4 差の 4 着でレースを終えました。その後に向かったセントジェームズパレスステークス（アスコット、G1、芝 1,590m）では最低人気（タイ）でしたが、ほぼ最後方から直線ではよく追い込んで、勝馬のパディントンには 4 馬身の差をつけられたものの、2 着の英 2000 ギニー覇者カルディーンにはクビ差まで迫る 3 着に好走しました。

翌月のジャンプラ賞（ドーヴィル、G1、芝 1,400m）を中団のまま 8 着で敗れた後は、古馬との初対戦となったサセックスステークス（グッドウッド、G1、芝 1,600m）へ。逃げたパディントンの直後を追走し、残り 200m までは先頭争いを繰り広げましたが、徐々に遅れて勝馬から4馬身半差、2 着のファクトゥールシュヴァル（今年のドバイターフ優勝）から 3 馬身差の 3 着でフィニッシュしました。さらに、3 週後に同じ舞台で行われたセレブレイションマイルステークス（G2）で続戦しますが、最後方から直線で一度は先頭を窺うも、最後は脚色が鈍って 3 着まで。世代上位のマイラーとして素質の片鱗は見せましたが、この年は 7 戦して未勝利に終わりました。

そして 4 歳の今年、シルベストル・デソウサ騎手との新コンビで大きな飛躍を遂げます。3 月のリステッド競走、ドンカスターマイルステークス（芝 1,600m）で始動し、後方から馬場の中央を伸びて先頭に立つと、最後は 3 馬身半差をつけて人気に応えました。1 か月後のサンダウンマイルステークス（G2、芝 1,600m）も 1 番人気に推され、出遅れたものの後方 2 番手から直線で外に持ち出されると、残り 200m で加速して 1 馬身 1/4 差で快勝し、2 つ目の重賞タイトルを手にしました。2 着ポーカーフェイスからクビ差の 3 着はドバイターフ 3 連覇のロードノースでした。

続くロッキンジステークス（ニューベリー、G1、芝 1,600m）は G1・6 勝のインスパイラル、前年のクイーンエリザベスⅡ世ステークス覇者のビッグロックに次ぐ 3 番人気で、ここは 4 番手あたりを進み、逃げたオーディエンスをとらえられず 1 馬身 3/4 差の 2 着でしたが、3 着以下には 6 馬身半もの差をつけました。次いで向かったロイヤルアスコット開催の開幕を告げるクイーンアンステークス（G1、芝 1,600m）は、堂々の 1 番人気でレースを迎えます。直線コースで二手に分かれた馬群のうち、スタンド側の 4 番手から徐々に進出すると、先に抜け出したオーディエンスを残り 200m 手前でかわし、最後は 2 着ドッグランズに 2 馬身 1/4 差をつけ優勝。キャリア 15 戦目で初の G1 戴冠となりました。

1 か月半の間隔を置いて出走したジャックルマロワ賞（ドーヴィル、G1、芝 1,600m）は、このレース 3 連覇の懸かるインスパイラルを抑えて 1 番人気に推されました。逃げたビッグロックの 2～3 番手から残り 300m で先頭に立つと、仏 2000 ギニー優勝の 3 歳馬メトロポリタンに 3 馬身をつける完勝。4 週後の 9 月 8 日にパリロンシャン競馬場で行われたムーランドロンシャン賞（G1、芝 1,600m）では、スローペースで逃げたトリバリストに 4 番手から迫りましたが、1 馬身 1/4 差及ばずの 2 着。こうして迎えた前走 10 月 19 日のクイーンエリザベスⅡ世ステークス（アスコット、G1、芝 1,600m）は、5 番手から余裕たっぷりに残り 400m あたりで先頭に立つと、後ろから馬体を並び掛けてきたファクトゥールシュヴァルを最後は 2 馬身突き放して人気に応えるとともに、3 つ目の G1 勝利を挙げました。

ここまで挙げた 7 勝（18 戦）のうち直線が 6 勝で、右回りは 6 戦 1 勝、2 着 1 回、3 着 3 回。良馬場で 3 勝、稍重で 1 勝、重で 3 勝と馬場状態を問わずに結果を残しています。マイルの持ち時計は今年 8 月に勝ったジャックルマロワ賞（直線）の 1 分 33 秒 9（良）で、これは 2010 年以降の同レースで 2 番目に速いもの。10 月 6 日までのレースが対象のロンジンワールドベストレースホースランキングでは、レーティング 122 で世界 8 位タイ、芝・マイル部門ではオーディエンスやロマンチックウォリアー、今年の英 2000 ギニー、サセックスステークス優勝の 3 歳馬ノータブルスピーチらと並んでトップです。来たるマイルチャンピオンシップがチャリンの引退レースとなる見込みで、来春からはオーナーのモンフォール・エ・プレオー牧場で種牡馬入りの予定です。

● **馬主：ナーラン・ビザコフ氏（Nurlan Bizakov）**

カザフスタンの実業家で、同国の鉱物質肥料や化学製品を扱う企業の買収、売却などを通じて巨万の富を築き、ヨーロッパの競馬界に進出。2010 年にイギリスのイースト・サセックス州のヘスモンズ・スタッドを購入、2019 年にはフランス・ノルマンディー地方のモンフォール・エ・プレオー牧場を取得し、現在ではビザコフ氏の故郷から名を取った“スンベ”のブランド名で競走馬の生産や購入などの事業を展開しています。

本馬以外のビザコフ氏名義の主な所有馬に2009年ロンズデールカップ（G2）など重賞3勝のアスカータウ、2017年オーソーシャープステークス（G3）の勝馬でファルマスステークス（G1）2 着のアルティンオーダ（生産者：ヘスモンズ・スタッド、調教師：ロジャー・ヴェリアン）、ジャンリュックラガルデール賞（G1）など 3 つの重賞を制したベルベク（生産者：スンベ）、今年のモーリスドゲスト賞（G1）を 6 戦無敗で勝ったラザット（生産者：スンベ）などがいます。

チャリンは来春からモンフォール・エ・プレオー牧場で種牡馬入りし、前述のベルベクやドバイシーマクラシックなど G1・3 勝のミシュリフらのラインアップに加わることになっています。

● **調教師：ロジャー・ヴェリアン（Roger Varian）**

1979 年 3 月 14 日、イギリスのオックスフォードシャー生まれで、ダーレー・ジャパンの取締役だった園部花子さんと結婚。自身は競馬と無縁の家庭に育ちましたが、幼少期からテレビで競馬を観戦し、13 歳のときからポイントトゥーポイント競走（クロスカントリー競馬）で馬に騎乗するようになり、その後障害の見習騎手として 7 勝を挙げました。落馬で手首骨折のけがを負い、以前に厩舎の仕事をしたことがあるニューマーケットのマイケル・ジャーヴィス調教師（凱旋門賞馬キャロルハウスなどを管理）のもとで調教助手を務めることになり、同師の引退に伴ってその厩舎（クレムリン・ハウス・ステーブル）を引き継ぎました。2017 年には、ニューマーケットの現在の厩舎（カールバーグ・ステーブル）に移転しています。

調教師として最初のシーズンとなった2011年は獲得賞金順のイギリスリーディングで23位といきなり頭角を現し、以降、着実に順位を押し上げて 2014 年に 7 位に入ると、翌年を除いて毎年トップ 10 圏内を維持しています。初の G1 タイトルは 2011 年オペラ賞（ナーレイン）で、2012 年フラワーボウル招待ステークス（同）、2014 年英セントレジャー（キングストンヒル）、2016 年ドバイシーマクラシック・コロネーションカップ・英インターナショナルステークス（ポストポンド）、2018 年 E. P. テイラーステークス（シェイカレイカ）、2022 年英セントレジャー・2023 年愛セントレジャー（エルダーエルダロブ）、2023 年英チャンピオンステークス（キングオブスティール）など、ここまで世界各国で G1 を 28 勝しています。

今年のイギリスでの成績は、本馬によるクイーンアンステークス、クイーンエリザベス II 世ステークス、エルマルカによる英 1000 ギニーで G1 を制するなど、11 月 4 日現在、471 戦 74 勝、獲得賞金は 345 万 7,743 ポンド（約 6 億 2,170 万円）でリーディング 8 位です。

日本での管理馬出走はスリプトラの 2012 年ジャパンカップ（17 着）以来、2 度目のこととなります。

● **騎手：ライアン・ムーア（Ryan Moore）**

1983 年 9 月 18 日、イギリス・バークシャー生まれ。父ギャリーは元障害騎手で引退後調教師、祖父も元調教師、弟のジェイミーも障害騎手として活躍。2000 年 5 月に障害戦でデビューして初勝利を飾ると、2003 年に見習騎手リーディングに輝き、2006、2008、2009 年には総合のリーディングタイトルを獲得しました。

2006 年にマイケル・スタウト調教師管理のノットナウケイトで英インターナショナルステークスを制して初めて G1 を勝利すると、近年は主戦を務めるエイダン・オブライエン厩舎の所属馬で G1 勝鞍を量産。クラシックは 2010 年ワークフォース、2013 年ルーラーオブザワールド、2023 年オーギュストロダンで英ダービー3 勝、2010 年スノーフェアリー、2016 年マインディング、2020 年ラブ、2022 年チューズデーで英オークス 4 勝、さらに英 2000 ギニー2 勝、

英1000ギニー4勝を挙げているほか、“キングジョージ”は2009年コンデュイット、2016年ハイランドリールで2勝。国外でも2010年ワークフォース、2016年ファウンドによる凱旋門賞2勝を始め、2008・2009年コンデュイット、2013年マジシャン、2015年ファウンド、2023年のオーギュストロダンでブリーダーズカップターフ5勝、プロテクショニストで勝った2014年メルボルンカップなど世界各国でG1勝利を収めています。

今年も世界各地を転戦したため、イギリスでは202戦48勝でリーディング23位に留まりましたが、欧州ではシティオブトロイとのコンビでG1・3勝、キプリオスでG1・4勝、ルクセンブルクでコロネーションカップ、ポータフォーチュナでファルマスステークス、オペラシンガーでナッソーステークス、コンテントでヨークシャーオークス、アメリカでもウォームハートでペガサスワールドカップターフ、レイクヴィクトリアでブリーダーズカップジュベナイルフィリーズターフ、アンリマティスでブリーダーズカップジュベナイルターフなどタイトルを積み重ね、今年8月のホイッスルジャケットでのモルニー賞で通算G1勝利数が200の大台に乗りました。

日本では2004年の京王杯スプリングカップで初来日し、2010・2011年にスノーフェアリーでエリザベス女王杯を連覇。2019年までと2022年・2023年および本年は短期免許を取得して騎乗し、2013年にジェンティルドンナでジャパンカップ、アジアエクスプレスで朝日杯フューチュリティステークスを、モーリスで2015年マイルチャンピオンシップ、2016年天皇賞(秋)を、ゴールドドリームで2017年チャンピオンズカップを、サリオスで2019年朝日杯フューチュリティステークス、ヴェラアズールで2023年のジャパンカップを制するなど、ここまで重賞17勝を含むJRA通算754戦143勝(11月3日終了時点)。2010年にはワールドスーパージョッキーズシリーズで総合優勝を果たしています。